

*書籍掲載版の訳者解説では紙幅の都合から内容を圧縮する必要があったため、ここにその完全版を公開します。本稿の無断引用・転載を禁じます。

訳者解説

本書は、この数十年の東南アジア史研究を牽引してきたアンソニー・リードが、初めて東南アジア地域全体の歴史を先史時代から現代まで一人で描き上げた畢生の大作である。リードはどのような歴史家で、本書はどのような新機軸をもつのだろうか。これらを検討するのが本解説の第一の目的である。本書はまた、非常に挑戦的な作品である。「国家や時代よりもテーマを強調し」（「日本語版への序」）、各章は国家や時代にもとづくのではなくテーマごとに立てられ、取り上げる時期は重複し、議論は地域を横断する。このような構成で複雑な歴史のダイナミズムを描くのに、本書は独自のキーワードや、新たな、または既存のものを読み替えた概念を用いる。これらに説明を加え、専門外の学生や社会人を含む広い読者に本訳書を深く理解していただく一助とすることが、本解説の第二の目的である。

続く第1, 2節では著者の経歴と研究史を解説し、本書の位置づけを図る（本導入部分を含め、太田淳執筆）。第3節では本書のキーワードや概念を取り上げて著者の提示する地域像を解説し、第4節は本書の時代区分について説明する（長田紀之執筆）。「訳者あとがき」に相当する末尾部分は太田が執筆している。

1. 著者アンソニー・リード

本書の著者アンソニー・リードの人生については、内外の同僚が捧げた *Anthony Reid and the Study of the Southeast Asian Past* (Wade and Li 2012) に詳しい。ここではおもにそれにもとづき簡潔にリードの来し方を振り返り、本書執筆に至る彼の知の旅路を紹介する。

リード（正式には Anthony John Stanhope Reid）は1939年、ニュージーランドのウェリントンに生まれた。その後ウェリントンにあるヴィクトリア大学に進み、1958年から東南アジア史という当時革新的であった分野を教え始めたエミリー・サドカ (Emily Sadka) に出会ったことが、彼の人生を決定づけた。同大学で経済学と歴史学の学士号 (1960) および歴史学修士号 (1961) を得た後、博士号の取得を目指したリードは、奨学金を得て1961年にケンブリッジ大学キングズ・カレッジに進学し、マラヤの華人研究で知られたヴィクター・パーセル (Victor Purcell) に師事した。学部時代に知り合ったヘレン・グレイ (Helen Gray)

もヨーロッパに移住してロンドン、アーヘンなどで英語を教え、オランダで文献調査を進めるリードと交際を続けたのち、1963年に二人は結婚した。リードはアチェを中心とする北スマトラにおける19世紀後半の政治抗争に関する博士論文を完成させ、1965年に提出した(Reid 1969)。

すぐには職を得られなかったリードは、ヘレンとともにヴァンでユーラシア横断の旅に出たが、その途中でマラヤ大学歴史学科から採用通知を受け取り、旅をマドラス(チェンナイ)で切り上げて船でクアラルンプールに渡った。東南アジア華人の専門家ワン・ガンウー(Wang Gungwu)が主任を務める歴史学科で、リードは東南アジア近世史の授業を任され、それが東南アジア全域に視野を広げる契機となった。彼は1966年からたびたびスマトラを訪れマレー半島との差異を認識するようになり、その原因の考察が、20世紀半ばの「社会革命」期(第16章)における北スマトラ社会の研究につながった(Reid 1979)。

1970年にリードはオーストラリア国立大学(ANU)太平洋アジア研究所(the Research School of Pacific and Asian Studies)に職を得て、家族とともにキャンベラに移った。まずリードは東南アジアの貧困の原因を近世の歴史に求めるというアイデアを追求し、東南アジアの奴隷制と従属をめぐる考察の成果を世に出した(Reid 1983)。さらにリードは、東南アジアの「商業の時代」(第3章参照)というアイデアを発展させ、その社会的文脈を考察するようになった。この成果が、彼の名を世界に知らしめる『商業の時代の東南アジア 1450-1680』(Reid 1988;1993, 本書第3章)である。

この代表作は大きな評判を呼び、おおむね好意的に受け入れられたが、批判もまた研究の推進力となった。批判の一部が彼の統計データに対して向けられたことから、リードは1980年代後半から東南アジア経済史と関連資料の収集・公開に注力し、世界中の研究者に呼びかけて200名からなる共同研究プロジェクト、Economic History of Southeast Asia (ECHOSEA)を主導して、近世東南アジア経済の定量的研究を大きく前進させた(Wade and Li 2012, 21, n. 56)。彼はさらに、同プロジェクトから派生したテーマである、東南アジア諸政体が植民地勢力に対して示した「最後の抵抗」(第11章)(Reid 1997)や、東南アジア内外における華人の歴史(第7章)の研究(Reid 1992; 1994)をチームで進め、そこからさらに「華人の世紀」(第9章)の考察を深めた。

30年近くをANUで過ごした後、リードはカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校に設立された東南アジア研究センター(Centre for Southeast Asian Studies)の初代センター長として招聘され、1999年にヘレンとともにロサンゼルスに移った。まもなくリードは、シンガポール国立大学に移っていたかつての同僚ワン・ガンウーに依頼されてアジア研究所(Asia Research Institute, ARI)の設立を任され、2002年からヘレンとともにシンガポールに移り、世界中から研究者を招聘してその基盤づくりに尽力した。彼は中国・東南アジア関係(第9

章)をはじめとするアジア間交流の研究を ARI 内で促進したほか、自身の長年のテーマであるアチェの研究を進め (Reid 2004; 2006)、さらに各地で体制を根本的に転換させたナショナリズムと「革命」(第 15、16 章) およびイスラーム (第 5 章) についての考察を深めた (Reid 2010; Morgan and Reid 2010; Reid 2011)。

リードは 2009 年にシンガポール国立大学を退職し、現在は ANU アジア太平洋カレッジ (College of Asia and the Pacific、かつての太平洋アジア研究所) 名誉教授として研究に専念している。多くの公務から解放された今、研究はまたも多岐にわたっているが、特筆すべきは火山活動など自然環境の変化が東南アジアの歴史に与えた影響 (第 1 章) について考察を深めていることである (リード 2014; Reid 2016a; 2016b)。最近も小説にも取り組むなど (Reid 2018)、今なお衰えを知らないリードは、今後もさらに東南アジア史を新たな見地から捉え直し、我々の知見を豊かにしてくれるであろう¹。

このようにリードのこれまでの研究は、(1) 近世・近代アチェ史、(2) アチェを中心とする東南アジアのイスラーム史、(3) 「商業の時代」の東南アジア史、(4) 東南アジアにおける「最後の抵抗」および「華人の世紀」、(5) 華人移民史、(6) ナショナリズムおよび「革命」の時代の東南アジア史、(7) 東南アジア環境史、と展開してきた。(1) でキャリアを開始したリードは、(3) 以降は特定のテーマまたは時代に焦点を当てて東南アジア地域全体の歴史 (全域史) を扱ってきた。本書で初めて全域史の全史 (先史時代から現代までの歴史) を一人で描くのを試みるにあたり、リードは (3) で用いた視点をもっとも重視していっそう掘り下げ、さらに既存の全域史の問題関心を批判的に継承し取り込んでいく。そこで次節では、先行研究の問題関心とリードの「商業の時代」のコンセプトがどのように結びつき、本書につながるのかを検討する。

2. 東南アジア全域史と『商業の時代』、および本書の特徴²

全域史を描く前提となるのは、東南アジアがひとつの研究対象となり得る独自の地域であるという認識である。東南アジアという地域概念自体が第二次世界大戦中に生まれたこともあり (第 20 章参照)、この認識は古いものではない³。東南アジア全域史を描いた最初の本格的著作は、ロンドン大学東洋アフリカ研究所 (the School of Oriental and African Studies) の D・G・E・ホールの手になる『東南アジア史』(Hall 1955) である。それ以前の研究が個別の植民地や王朝、そして「インド化された国々」(第 2 章参照) の歴史を描いたのに対し、ホールは「東南アジア」という新しい地域概念を明示的に使用した。ホールは 1949 年に同研究所に新設された東南アジア史講座の初代主任であったこともあり、この地域がインドと中国の文化的影響で構築され独自の文化をもたないという当時の言説に強く反発した。そして彼はこの著作において、東南アジア史は、「中国、インド、西洋との接触からのみ検

討されるのではなく、それ自体の視点から考察されなければならない」と主張した。しかし彼の述べる「それ自体の視点」は明確でなく、4部構成の各タイトルが「前ヨーロッパ時代」、「ヨーロッパの拡大初期における東南アジア」、「ヨーロッパの領域的拡大期」、「ナショナリズムとヨーロッパ支配への挑戦」であることから、ヨーロッパ中心史観は明らかである。

これに対して 1950年代からアメリカで戦略的に始められた東南アジア地域研究の先駆者たちは、東南アジアを独自の地域——それゆえひとつの研究対象——として捉えることに懐疑的だった。コーネル大学の政治学者ジョージ・McT・ケーヒンは1959年の著作で、東南アジアがひとつの単位であるとするれば、それは構成国が近接し、経済や経済問題が類似し、中国とインドに挟まれていることを認識しているから「[にすぎない]」と述べた (Kahin 1959, v)。アメリカの東南アジア地域研究における当時の重要なテーマは東南アジアの「自律的な歴史」を描くことであったが (Smail 1961)、そうした問題意識から東南アジアの歴史に通底する社会的・政治的構造を総体的に追求したイェール大学のハリー・J・ベンダもまた、その民族的・言語的・宗教的分断を強調した (Benda 1962, 108)。

1960年代から70年代にかけて、東南アジア全域を対象とする通史が数多く書かれるようになるが、これらの著作はこの地域をひとつの考察対象とすることを、「次第に難なく」受け入れるようになった (Legge 1993, 1)。18世紀以降を扱った全域史であるデイヴィッド・ジョエル・スタインバーグ編『東南アジアを求めて——近代史』 (Steinburg 1971) は、この地域が独自の共通性をもつことへの確信が前提になっている著作の例である。ミシガン大学などで教える若手研究者であった執筆者たちは、地域に共通性をもたらす要因は自然環境であると主張した。スタインバーグによれば、ビルマからバリまで水田と焼畑からなる景観が繰り返され、大陸部ではデルタ・河川沿いの平野や盆地・分水嶺という組み合わせがパターンを形成する。分水嶺が政治的境界となる一方で河川流域は豊かな文明地帯であり、降水量が多いところで水田耕作が行われる一方少ないところでは社会も農業も未発達であり、それは島嶼部でも同様とされる (ibid., 5-6)。この著作のもうひとつの特徴は、第1部「18世紀の世界」の前半に「農民の世界」「高地の人びと」「宗教生活とリーダーシップ」といったテーマ別の章が立てられ、地域横断的な説明が行われることである。このように、自然環境への着目や、内的共通性にもとづいてさまざまなテーマを地域横断的に検討する姿勢などは、本書と共通するといえる。

オーストラリア国立大学の歴史学者ミルトン・オズボーンによる『東南アジア——入門的歴史』 (Osborn 1979) は、東南アジアが内的共通性をもつことについて、さらに確信的である。彼によれば、共通性は、独自の文化 (インドの宗教が受容されてもカーストが導入されないこと、女性の地位が高いことなど) や言語 (いくつかの言語グループが東南アジア大

陸部を中心に分布し、島嶼部ではマレー語が広範に使われることなど) にあり、彼自身が述べるように、それまでの個別研究の発展が反映されている (ibid., 12-6)。この著作の構成は、ヨーロッパ人の到来以前と以後で二分する点でホールの構想に近く、前者を変化の少ない「伝統的」時代としてテーマごとに略述する点でスタインバーグを継承する。テーマには宮廷、王、農民などに加えて移民や奴隷が含まれ、全地域を俯瞰的に説明する。近代史では政治変化を国別に説明する部分が多いが、植民地期の経済変容を説明する章では主要輸産物ごとに、アジア人移民の章では民族別に、地域横断的な検討も行われる。

このように本書と同じく自然環境や文化に地域の共通性をみいだす視点、またいくつかの要素について地域横断的に説明する姿勢は 1970 年代までに生まれていた。しかしこれらの著作はいずれもこうした要素を「近代史」の前史として説明しており、国別に近代政治史を描くことを叙述の中心とした点で、本書との違いは大きい。

1980 年代に入ると、東南アジアに通底する文化的特徴や支配の論理から地域の独自性を明らかにする試みが始められた。コーネル大学の歴史学者 O・W・ウォルターズは自著『東南アジアの視点における歴史・文化・地域』(Wolters 1999[1982]) において、「卓逸なる者」——カリスマをもつ個人——や、「マンダラ」政体——緩やかにつながり中心性が移ろい続ける複数の政——(ともに上巻第 2 章訳注 6 参照) といった概念を章のテーマとし、それらが 15 世紀頃までの東南アジア各地に繰り返し生起し地域を特徴づけたと論じる。彼はフェルナン・ブローデルの論じた地中海と比較して、東アフリカから中国に至る「ひとつの大洋」が、外来文化の「現地化」過程を通じて東南アジアに共通性をもたらしたと述べ、文学作品などからそれを検討した (ibid., 38, 52, および Ch. 4, 5)。特定のテーマから東南アジアの特徴を説明しようとするアプローチや文化面の重視において、この著作は本書の先駆けといえよう。

こうしてウォルターズによって始められた東南アジア自体の文化や論理を重視した歴史理解を、最初に全域史の叙述に応用したのは石井米雄と桜井由躬雄の共著『東南アジア世界の形成』(石井・桜井 1985) である。京都大学東南アジア研究センター(当時)に所属したふたりは、その特徴である自然科学との協働の成果を反映させ、とくに農学の知見を取り入れて、湿潤水稲作を基盤とする地域の独自性を主張した。さらに著者たちは、欧米由来の歴史概念をできる限り排し、「ムアン」や「ヌガラ」など東南アジアの政体概念を用いて、地域自身の論理と歴史のリズムによって地域史を統一的に説明しようとした(これに対する批判に桃木 1996、53-4 頁)。リードは日本語を読まないが、本書につながる視点が日本で始まっていたことは興味深い。

80 年代後半になると、貿易も着目されるようになった。マサチューセッツ・カレッジ・オブ・リベラルアーツの歴史学者ケネス・R・ホールは 1985 年の著作で、既存の研究は 15

世紀より前の歴史を検討する際に、外来者の記録を反映して政治と宗教に集中していると批判し、考古学における研究の進展を反映させて、貿易のパターンが国家の盛衰と強く連関することを強調した (Hall 1985, vi-vii)。オーストラリア国立大学のワン・ガンウー (先述のワンと同一人物) も、15 世紀以前の東南アジアにおける海洋貿易の重要性を指摘した (Wang 1986, xvii)。

このように 1980 年代には東南アジア独自の文化的や論理、生態環境、貿易など、本書に連なる問題関心が発展していたが、リードの『商業の時代の東南アジア 1450-1680』(全 2 巻、Reid 1988;1993) はさらにブローデルの「全体史」の概念を新たに取り入れ、東南アジア史研究に画期をもたらした。「全体史」はブローデルをはじめとするフランスのアナール学派で発展した概念で、歴史の三層構造を強調する。もっとも基層に動きの少ない環境の時間があり、その上に緩やかに流れる経済や文化の時間がある。もっとも変動の大きな政治的出来事の時間は、それらの上で成り立つ。『商業の時代』上巻は環境、衣食住に関連する物質文化、人口や病気、ジェンダー、娯楽など、アナール学派に典型的な経済・文化面のトピックを検討し、東南アジアにみられる共通性、貿易の卓越、米と(発酵させた)魚介を中心とする食事、縫製しない綿布の衣服、高床式の住居、女性の地位の高さなどを挙げた。このように同書は、環境と深く関連した物質文化やジェンダー関係に地域の共通性をみいだすのが特徴であり、それは本書にも受け継がれている。リードはまた、東南アジア全域を扱うのは、それによってこの地域の気候や商業的推進力の相互作用から、共通の物質文化が生まれたことを描けるからであると述べた (Reid 1988, xiv-xv)。このような理解が、同書の刊行以降リードが積極的に全域史に取り組んでいることと関係しており、本書でも適用されている。

下巻は 15-17 世紀の経済、宗教、政治における出来事や変化の歴史を描くが、興味深いのは、各章の記述が王朝ごとではなく、港市、宗教革命、絶対主義国家などのテーマごとに、地域横断的に行われたことである (Reid 1993, Ch. 2, 3, 4)。ウォルターズが東南アジア独自の要素をテーマとしたのとは異なり、『商業の時代』は他地域とも共通する特徴を取り上げ、それらが時代とともにこの地にあらわれたことを論じた。リードはいわば東南アジアらしさを形成する要素は他地域と比較可能であること、それらは時代とともに変容することを示したといえる。

『商業の時代』はまた、貿易ブームの契機として、ヨーロッパよりもアジアの要因を強調した。リードによれば、鄭和の遠征に象徴される朝貢システムの発展、西アジアや北西インドからのムスリム商人の来航、そしてアメリカ大陸銀や日本銀の流入(多くは中国船による)が、東南アジアに「商業の時代」をもたらした。ウォルターズやケネス・R・ホールなどが一五世紀頃までを検討の中心とした大きな理由が、16 世紀からヨーロッパの影響が増

大して東南アジアの発展が阻害されることであったが、リードは16世紀も地域の商業が発展することを論じた⁴。リードは東南アジアがインドと中国の文化的影響で構築されたという言説は否定したが、アジアの他地域との相互作用は重視した。この相互作用を可能にしたのは、活発な貿易、外部からの移民、東南アジア人が外部のものを現地に適応させる能力、そして独自の造船・航海技術や貿易ネットワークであった。

この著作が学界に与えた影響はまさに甚大で、ここから刺激を受けて多数の作品が生まれた。J. カティリタンビー＝ウェルズとジョン・ヴィリアースは、15世紀に貿易環境が変化したのではないと主張し、東南アジアの港市政体が盛衰した個別の要因を長期的なスパンで探ろうと試みた (Kathirithamby-Wells 1990, 5-6)⁵。また、リードの著作に呼応した研究者たちによる地域の貿易、権力、宗教の再検討は、リード自身によって編著にまとめられた (Reid 1993)。さらに、リードが女性の自律性を強調しすぎているとの批判は、バーバラ・W・アンダヤ (Andaya 2006) などの著作につながった (太田 2016)。1680年代からの東南アジアの衰退が強調されすぎているとの批判は、リードを含む多くの研究者による18世紀の再検討と「華人の世紀」の考察につながり、それまで国家の衰退で特徴づけられていた東南アジアの18世紀が、華人商人・移民の活動により経済的に再活性化した時期として捉え直された (Reid 1997; Blussé and Gastra 1998; Tagliacozzo and Chang 2011; 桜井 1995; 桜井 2001)。これらの一連の著作の成果は、本書に再び還元されている。

『商業の時代』後に刊行された重要な東南アジア全域史に、オークランド大学の歴史学者ニコラス・ターリングが編集した『ケンブリッジ東南アジア史』全2巻 (Tarling 1993) がある。ここでは多数の研究者が、政治・経済・宗教文化などについて多面的・網羅的に論じている。この著作では、ヨーロッパ人到来以前を地域の前史とする見方は取られず、先史時代から順に叙述がなされた。それまでの全域史と比べ経済や宗教に関する記述が多いのが特徴だが、宗教以外の文化面 (文学や芸術、ジェンダーなど) はあまり言及されない点が、本書と大きく異なる。

2000年代に入ると、より独自の視角から東南アジア史を描く著作があらわれた。ミシガン大学のビルマ史専門家ヴィクター・リーバーマンは、著書『奇妙な並行』^{ストレンジ・パラレルズ}で、東南アジア大陸部の国家の興隆には他の多くのユーラシア諸国家との並行性がみられること、その要因として内陸アジアの遊牧民族との関係や気候変動が働いていたことを論じた (Lieberman 2003; 2009)。彼は17世紀後半まで商業的拡大が続くとするリードの説に批判的で、大陸部の気候変化や国家の盛衰と合致しないと主張する。これに対しリードは本書で、気候変動の影響は温帯で大きく熱帯で小さかったことから島嶼部における自身の議論を擁護するとともに、リーバーマンの議論が国家に集中しすぎていることを指摘している。とはいえリード

は「はじめに」で記しているように、リーバーマンに大きな刺激を得たことを認め、「憲章の時代」をはじめ彼の提唱した概念を多く本書に取り入れている。

イェール大学の政治学者ジェームズ・スコットによる『統治されないという^{ジ・アート・オブ・ノット・ビーイング・ガヴァンド} 芸芸』(邦訳『ゾミア——脱国家の世界史』)(Scott 2009 [スコット 2013])は、リーバーマンの『奇妙な並行』とは対照的に、東南アジア・中国国境の山岳地帯で国家支配を逃れる人びとを対象とし、彼らは意図的に山地に移動して非国家社会を維持したと論じた。同書はリーバーマンの『奇妙な並行』とともに、直接的に本書に影響を与えた著作であり、本書で非国家社会への着目が多くみられるのは、リードが認めるようにスコットの大きな影響である。

最後に、東南アジア全域史の近年における重要な著作として、シンガポール国立大学の歴史学者 M・C・リックレフスが編集した『新しい東南アジア史』(Ricklefs 2010)を挙げたい。リックレフスはその序文で、この著作が D・G・E・ホールを継承するものと明言し、個人的親交のあったホールの著作を、その包括性と実証性から高く評価する(ibid., viii-x)。もっともリックレフスの編著は、その内容も構成もホールの『東南アジア史』とはまったく異なる。リックレフスとその同僚から成る執筆陣は、50年以上にわたる実証研究の進展と新たな研究視角を取り入れ、顕著なヨーロッパ中心史観を取ることなく、はるかに豊富な情報を示している。本書と比較してこの編著の特徴を述べると、各章における時代の重複はずっと少なく、章ごとにさまざまなテーマを取り上げながらも、一続きの通史として読みやすくする工夫がされている。節や項のタイトルには国名、宗教名、さらに時代を下ると特定の政権などがあてられ、読者はそれらを参照しながら関心のある項目に容易にたどり着ける。いわばこの本は教科書または事典としての利用が強く意識されている。

本書はこのように、おもに 1980 年代以降の研究から問題関心を継承し、さらに自著『商業の時代』で探究した議論を発展させながらも、それらを大きく乗り越えている。東南アジアを特徴づける要素として自然環境を重視する点はスタインバーグに始まり、石井・桜井が農学の視点も取り入れて発展させ、『商業の時代』でさらにブローデルの議論を吸収して展開された。本書はさらに、この 20 年ほどで急速に進展した過去の地殻変動や気候変動に関する研究成果を取り入れ、それまでやや非歴史的に通時的特徴として捉えられていた自然環境を、地域の政治経済に影響を与える歴史の変動要因として扱う。過去の特定の気候変動が農業や政体に影響を与えたことはリードやリーバーマンが近年論じていたが、リードは本書でそうした議論を東南アジア全体で長期にわたり展開する。

東南アジア独自の文化的特徴や支配の論理を強調する視点はウォルターズに始まり、石井・桜井の共著およびリードの『商業の時代』で大きく発展した。しかし本書は『商業の時代』よりも対象時期をはるかに長く取り、文化的特徴や支配の論理も時代とともに変化することを示している。さらにリードは、この 30 年にあらわれた新たな研究成果を独自に改訂

しながら議論に反映させている。詳細は第3節で述べるが、たとえばシェルドン・ポロックが第一千年紀におけるサンスクリットの拡大とその後の現地語化を論じるのに用いた「ヴァナキュラー」の概念は（Pollock 2006）、本書では18世紀東南アジア各地で後代のネーションを準備する文化圏が発展する過程を説明するのに用いられる。東南アジアらしさを形成する要素は、現代に至るまで時代ごとに異なる斬新なものが取りあげられ、それらが本書各章のテーマとなっている。

ホールが試みた地域全体を網羅的・教科書的に描く試みは、スタインバーグやターリングがさらに展開し、リックレフスへと続いた。これらの著者たちは国家に焦点を当て、王朝や国家の交代によって時代を区分する傾向をもった。本書の最大の魅力は、リードがそのような戦略を採らず、気候や災害、商業、男女の役割分担、^{パフォーマンス}表 演——書かれた文芸と対比される、踊り、詠唱、演劇、音楽など——を通じて、さらに女性や非国家社会など従来の歴史叙述からこぼれ落ちていたアクターを動員して、政治的出来事の歴史を論じる点である。つまり、ブローデルの論じた歴史の三層構造が、本書でまさに重なり合うといえる。表演の議論はネーションの歴史につながり、メディアの検討から政治史が論じられる。議論は国境を越え、地域内外の比較——インドネシアとビルマの軍、東南アジアとヨーロッパの都市化など——が行われる。

ホールからリックレフスに連なる網羅的な全域史の厳密な叙述と比べると、本書はリードがより自由に創造性を駆使した作品といえる。しかしそのことは、本書が実証性を軽視していることを意味しない。それどころか、リードは驚くほど広範に、地域や学問分野を超えて過去の研究蓄積を取り入れている。それでもなお本書が大量の情報で息苦しくならないのは、魅力的なキーワードや概念を切り口に縦横無尽に歴史を語るからである。この点については、次節でさらに解説する。

3. 交差路が育む知恵——本書の通奏低音

今回のリードによる全域史叙述の企ては、具体的にどのようなものであったのか。以下ではその概要を本書での言葉遣いに即して検討し、訳出のポリシーを示しながら、この長編の通奏低音となっているメッセージについて考える材料を提供したい。

せめぎ合う「一」と「多」

本書は、東南アジアは世界にも類をみないほどの多様性（diversity）を抱えながら、内部を貫く共通性（coherence）ゆえにひとつの全体（a whole）として捉えられる、という認識を前提としており、この多様性と共通性をバランスよく描くことを目標として執筆された。そ

のための補助線が、環境・ジェンダー・非国家という3つのテーマであり、それぞれ、火山噴火や地震が頻発する熱帯の水域に位置すること、女性の経済的役割が大きいこと、多くの人びとが国家の影響の外側に生きてきたこと、という東南アジアの特徴に対応する。また、これらの特徴が地域を超えた重要性をもつことも強調される。原書副題の「決定的に重要な交差路 (critical crossroads)」はそうした主張を凝縮しており、critical という語は、域内の火山活動が地球全体の気候に甚大な影響を及ぼしてきたことや、近世のグローバルな商業の興隆や近代性の誕生に東南アジアが重要な役割を果たしたことを意味すると同時に、この地に特徴的なジェンダー・バランスや非国家性が現代世界に対するある種の批評性を帯びていることを示唆する。これからの人類は環境と調和し、男女の均衡を保ち、国家に過剰に依存しない生存の仕方が必要となるため、東南アジア史を学ぶことは、地球の将来に関心をもつすべての人のためとなるというのである。

これらの特徴以上に、東南アジアをひとつの全体にしてきたのは、「多様であるというまさにその事実と、多様性を維持し乗りこなす知恵」(1頁)である。しかし、リードはこれについての総括的な議論を本書の冒頭や末尾に提示してはいない。むしろ、本書の全体にいくつかのキーワードをさりげなく散りばめることを通じて、異なる時空間に生じた諸事象のあいだに連関を生み出し、ひとつの大きなナラティブに編み上げるという方法が採られている。ここでもやはり原書副題が手がかりとなる。「交差路」には、洋の東西を結びつける国際貿易の要衝というだけでなく、複数のプレート沈み込み帯が縦横に走る危険な位置にある地域、ひいてはさまざまな社会関係の交差する場所という意味までが重層的に含まれているのではないだろうか。本書の描く東南アジアは、無数の関係性が交差するなかで、多様であることの内実がつねに更新されていくような世界であり、その機制のあり方にも批評性がみいだされているといえよう。

リードが述べる東南アジアの多様性には、生態環境の地域差や、生物種の豊富さだけでなく、人間の諸社会における多元性 (pluralism, plurality) という側面がある。つまり、複数の集団や政体が併存しているのが社会の基本的な姿であるという見方であり、そこからは、さまざまな力の働きによって社会が「一」なるものへと向かって(部分的に)まとまることもあれば、根源的な「多」への揺り戻しが起こることもある、という動的な社会像が導き出される。社会の統一を促す (unifying) 要因は、大河川のような自然地形や傑出した個人のカリスマの場合もあれば、国家 (state) の機構や経典/啓典宗教 (scriptural religions) のイデオロギーである場合もある。しかし、統一された状態が安定を保つことはほとんどなく、ましてや、東南アジア全体が一色に染め上げられることもない。統一を促す力は、別の側面では分裂をもたらす (divisive) 要因にもなりうるのである。少数の極に向かって収斂する力が働くと、個々のまとまりの外縁をなす境界 (boundary) が越えがたいものとして出現し、

かえって社会のなかの亀裂が深まる分極化 (polarization) が起こる。したがって、本書の読み手は、部分社会が均質的な集団へと向かう現象を指す「統一」と、東南アジアが多様性を保持しながら共通性を有するというときの「ひとつの全体」とを、異なる次元にある言葉として厳密に区別しなければならない。

タテとヨコの交わり

このような多元的な社会において、各個人・集団・政体は相互にさまざまな関係を結ぶ。リードはこれらの関係のあり方を大きくふたつのカテゴリー——垂直的な関係と水平的な関係——に分けて捉えている。垂直的な関係を象徴する言葉が、階層秩序 (hierarchy, 序列と訳した箇所もある) である。ある社会が階層秩序をもつとき、人びとはそのなかで特定の地位 (status) を占めることで他者と関係づけられる。なかでもパトロンとクライアントの二者関係が典型的であり、パトロンはクライアントに庇護 (patronage) を与え、クライアントはその見返りにパトロンに対して一定の義務 (obligation) を負う。義務の履行を怠ると、パトロンはなんらかの懲罰を下す。クライアントの置かれたこの拘束的状况はしばしば従属 (bondage, bondsman)、隷属/奴隷 (slavery, slave) という言葉で表現される。こうした互酬性は人間同士の関係を超えて、精霊や神々との関係にまで敷衍される。本書に登場する人びとは精霊や神々に対する帰依 (devotion) ⁶を示すことで、超自然的な力を自らのものにしてしようとするが、帰依が不十分・不適切であれば天罰を受けるとも考える。

リードは環境や経済といった大きな現象を記述する一方で、個人が歴史において果たした役割も重視しており、王と総称しうる多様な支配者たち (ラジャ、スルタンなど) に注目する。王を中心とする政体/政治体制が君主制 (monarchy, 一部で王権などと訳出) である。王たちは、その地位にふさわしい所作を実演することで自身を戴く階層秩序を体現する模範的中心 (第8章訳注1参照) であり、ときには調停者 (referee) として諸勢力間の利害調整にあたることで階層秩序内での多元性に対処した。模範 (example) として振舞うことには、自らの威光が普遍的に及ぶという主張が含まれるが、現実の多元的な世界においてはそうした主張は相対化されざるを得ない。王たちは、並び立つ他の王たちとの関係のなかに自らを位置づけ、一定の自律性を保ちながらも、強者に対しては貢物 (tribute) を送り、敬意 (deference, 恭順と訳した箇所もある) を示すことで、懲罰を回避し、自らの存続を保證する承認を取りつけた。19世紀以前には、こうした垂直的な関係の頂点に中国皇帝がいると想定され、域内の各地から中国への朝貢が盛んに行われた時期もあった。朝貢も原著では tribute であり、リードは朝貢システムのような国際秩序のあり方も二者関係の連なりの延長線上に捉えている。総じて、垂直的な関係はパフォーマンス/表演 (performance) の政治との結びつきが強く、しばしば男性的なものとして論じられる。

他方で、水平的な関係は、商業（commerce）と結びつけて記述されることが多い。東南アジア史家としての彼の名声を確立したのが「商業の時代」の概念であったように、リードの歴史観において商業のもつ意味はきわめて大きい。それは単なる経済の一分野ではなく、社会に好ましい変化をもたらす活力の源である。世界史上の時代区分である近世＝初期近代の到来、つまり近代性の始まりを告げたのも世界規模での商業の隆盛であり、そこで東南アジアは重要な役割を果たした。水平的な関係は、そうした商業の特質の一側面をなしており、具体的には貿易を担うコミュニティのネットワークにあらわれる。貿易結節点に発達した商業コミュニティでは、都市性とコスモポリタニズムが涵養され、後述のように多様な文化や技術の混雑が起き、そこから革新が生み出される。信仰面では、移動性の高い商人たちは在地の階層秩序から比較的自由であり、仏教やイスラームといった、域外に由来し、持ち運び可能な普遍的規範をもつ経典／啓典宗教を選好する傾向があった。また、商業的な価値観が卓越する時代や場所では、政治においても定型的なパフォーマンスより、臨機応変のプラグマティックな振舞いの比重が高まる。後者には、同盟（alliance）、連立（coalition）、連邦／連合（federation）、連携（partnership）が含まれ、個人や個々の政体の自律性を担保する水平的な関係が築かれるためには、契約（contract）、交渉（negotiation）、承認（acknowledgement）、合意（consensus）、妥協（compromise）などが鍵となる。こうした政治的態度は、いうまでもなく政治体制としての民主制／民主主義（democracy）との親和性が高い。さらにジェンダーについても、東南アジアでは男女の役割分担のバランスがとれていたという本書に繰り返し登場する主張は、女性が商業に大きな役割を果たしてきたことと結びつけられる。

しかし本書は、前近代的な垂直性の悪が近代的な水平性の善に取って代わられるという単純な予定調和の物語ではまったくない。リードはどの時代の記述においても、垂直的・水平的な諸関係を複雑に交差させながら歴史が展開するさまを描き出す。そして、どちらのカテゴリに含まれるものであれ、先に挙げた諸要素の多くは東南アジアの歴史に深く根差しており、今後も長期的に持続していくことを示唆する。19世紀以降の宗教をめぐる記述を例にとると、一方では、水平的志向性があったはずの仏教やイスラームが、新伝統主義（neo-traditionalism）と結びついて在来の階層秩序を強化したことを論じつつ、他方では、それらの宗教が禁欲を是とする純潔主義（puritanism）の高まりとともに女性に対する抑圧を強めたにもかかわらず、東南アジア固有のジェンダーのあり方が抑圧の効果を和らげたとも論じているのである。また、ネーション（nation）間の理論的平等を謳う近代の国際秩序が、実は文明（civilization）や人種（race）を地位の指標とする新しい階層性を有しており、自らに都合よく在来の階層秩序を「保護（protect）」しようとする植民地統治者たちの父権主義／温情主義（paternalism）あるいは保守主義（conservatism）の施策ともあいまって、垂

直接的な関係性の変容をとめないながら持続したことを強調すると同時に、東南アジア社会の根本的な多元性が民主制への要求を間欠的に噴出させてきたことも指摘している。

ウチとソトの出会い

論述の複雑さは、内と外というカテゴリーについてもみられる。垂直性と水平性の対照を直接的に示す対概念があまり登場しないのは異なり、原書には内外の区別を示す *indigenous* と *foreign* という語彙が頻出し、ほとんどの場合、前者は東南アジアの内側に、後者はその外側に起源をもつ（と想像される）ヒトやモノを指す。内と外を分ける基準となるスケールは、あくまでも東南アジアという地域であり、個々の政体や域内の小地域ではない。東南アジアの全域史を追求するリードの態度が如実にあらわれた用法といえるだろう（したがって、訳書で *indigenous* は「東南アジアの」「域内の」「在来の」などと訳した）。本書における東南アジアの地理的な範囲は、現在のアセアンに東ティモールを加えた合計 11 カ国の領域におおむね合致しており、全章を通じてその設定が厳密に維持されている。リードは中国南部やインド南部がかつては「東南アジア的」とも呼べる性格を有していたとして、隣接地域との連続性に注意を促しつつも、長い歴史過程のなかで東南アジアが他地域とは異なる独自性 (*distinctiveness*) を形成してきたことを強調するのである。

ただし、東南アジアの地理的な範囲が明確に設定されたとしても、個々の要素が外来か在来かは客観的に判別しきれものではない。なぜならば、東南アジアは歴史を通じて外来のヒトやモノや思想に影響を受け、それらを取りこみながら、在来なるものを絶えず更新させてきたからである。したがって、外来か在来かの振り分けには、域内の当事者たちの主観的認識が多分に影響する。例えば、20 世紀前半のナショナリズム高揚期の記述において、リードは *Sino-Southeast Asians* と *indigenous Southeast Asians* を対比的に用い、両者をともに「東南アジア人」とみなしつつ、当事者に認識されたルーツの違いによってふたつの下位範疇（「華人系東南アジア人」、「在来系東南アジア人」と訳した）を使い分けている⁷。また、20 世紀後半の国際的な先住民運動に関する箇所では、限定的な土地のうえでより真正な「先住性／在来性」を主張する当事者の自己表象の言葉として *indigenous* が用いられる。

ともあれ、混淆による在来なるものの更新は本書を貫く基調のひとつとなっている。外来の要素を単に借用 (*borrowing*) し、現地化 (*localization*) するとどまらず、異種混淆 (*hybridization*) を経て新しく生まれたものが次代における「在来」を用意する。こうした変化をもたらすのは東南アジアの人びとの主体性であり、とくに内と外を媒介する (*mediate*) 人びとが重要な役割を果たす。本書では、外来の技芸を在地社会に適応させる (*adapt*, ほとんどの場合に他動詞として用いられる) ことが強調され、異なる文化要素を融合する営みは、妥協 (*compromise*) や実験 (*experiment*) といった特殊な意味を帯びた言葉で表現され

る。また、異なる宗教の混淆によって生じた文化・信仰は、シンクレティズム (syncretism) あるいはインドネシア史家 M・C・リックレフス (Ricklefs 2006) にならってシンセシス (synthesis、習合と訳出) と呼ばれる。このような混淆が域内の各所で、歴史上何度も繰り返されることによって、本来から多元的な東南アジアにおいて多様性が無限に生成され続けるのである。

混淆は多様性を生み出す一方で、一定範囲の社会においては諸要素の包摂と統合をもたらすこともあった。長い歴史を通じて、東南アジアは根本的な多元性を持続させてきたにもかかわらず、人びとの生活を規定する基本的な単位としての 11 の国民国家 (nation-state) というまとまりに収斂してきたともいえる。リードは、この少数の国民国家へと収斂する長期的なプロセスのなかに混淆の役割をみいだす。この点に関して、きわめて重要なのがヴァナキュラリゼーション (vernacularization) という概念である。リードはサンスクリット文献学者シェルドン・ポロック (上巻第 2 章訳注 1 参照) に強く触発され、ある面ではヴァナキュラー (vernacular) を、経典／啓典の「神々の言語」と対比される「俗語」としての現地語を指して使う。この場合、ヴァナキュラリゼーションは、ある地域で政治的・象徴的な重要性をもつ言語が「神々の言語」からヴァナキュラーへと移行することのみならず、それにもなって外来の経典／啓典宗教などの文化要素が現地化し混淆や習合を遂げていくことも含意する。こうした新しい文化の形成は、やはり言語にまつわる比喩的な表現を用いて、慣用語法 (idiom) の生成とも表現される⁸。

ただし、ここで注意すべきは、リードの用いるヴァナキュラリゼーションが普遍から在地へという一方向的な動きだけを示しているのではないことである。この語彙は、各地で話される地方語／方言 (dialect) が無数にあるという多元性を前提とし、それらがある範囲内で標準化してひとつの共通言語 (lingua franca) として成立していくことも意味する。つまり、ヴァナキュラーな言語や文化は、高文化の普遍性／神聖性と在地の多元性との中間的な位置を占めており、将来的にネーションを形成しうる母体として考えられる。近代には、植民地宗主国言語との対抗のなかで、域内のいくつかのヴァナキュラーが国民語 (national language、場合に応じて民族 = 国民語や国語などと訳し分けた) に選定され国家との結びつきを強めるが、その選に漏れたヴァナキュラーは、やはりナショナルな次元とローカルな次元との中間にとどまることになるのである。以上のような、俗語であり、ネーションを準備する言語でもあるというリード独自のヴァナキュラーを翻訳するにあたって、本訳書ではほぼ一貫して「民俗語」という造語を用いることにした。

ところで、東南アジアにおけるネーションの形成と聞いて読者がまず思い浮かべるのは、リードと同じくインドネシアを主要な研究対象としたベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』 (Anderson 1983 [アンダーソン 2007]) ではなかろうか。アンダーソンは、南

米からヨーロッパを経て世界中に流行した範型としてのネーション概念の旅程を描くなかで、それが19世紀半ば以降に東南アジアへと到来し、印刷資本主義のもとで特定のヴァナキュラーが出版後となったことに注目する。リードはこの議論を踏まえつつも、徹頭徹尾、東南アジアに視点を据え、長期的な、とくに近世後半の「長い18世紀」における民俗語化^{ヴァナキュラリゼーション}を重視する。またリードは、印刷出版を含む文字文化一般（書くこと、writing）よりも、詩歌や演劇などの身体的なパフォーマンス／表演が地方語の標準化と民俗語の生成に果たす役割を強調する。このような近世における凝集（consolidation）の局面の重視は、リーバーマンの「奇妙な並行」論（上巻「はじめに」訳注1参照）とも通底する。ただし、リードは島嶼部も含めた東南アジアをひとつの全体として描き、海域や山地といった非国家的空間にも意を払って国家の過大評価を避けようとする姿勢を保つ点では、リーバーマンとも立場を異にしている。表演や非国家性に留意した民俗語化の議論は、本書の大きな特徴のひとつだろう。

4. 歴史を分節する——本書の構成と時代区分論

リードは本書で、東南アジアの通時的な独自性を強調する一方で、外世界との連関や比較につねに注意しながら独特の時代区分論を構築している。普通の通史とは異なって章立てがトピックにもとづき、各章の対象時期にかなりの重複がみられるために見てわかりづらいが、おおむね次頁の図（本付録では省略したため、書籍参照のこと）のような構成になっている。本節では、東南アジアの生態環境と社会的特徴を概観する第1章に続く第2章以降について、おもに国家（政治史）と商業（社会経済史）という観点から本書の概要を示しつつ、改めてリードの用語法や歴史観の特徴を確認していく。

国家という経験

本書は、東南アジアの非国家性に注目し、国家中心の歴史叙述の相対化に多大な努力を傾けているが、国家の存在を度外視してもいない。むしろ、歴史的に国家の存在感の小さかった東南アジアにおいて、国家（とくに近代の法治官僚制国家）がどのように経験されたのか、という問題への洞察が深められているのである。リードは先行研究を幅広く参照し、東南アジアの歴史上に興亡したさまざまな国家を、存続した時代や特徴にもとづいて鮮やかに類型化する。

10-13世紀、灌漑稲作を基盤とし比較的稠密な人口を有する中核地域（heartland）を拠点として、文化的洗練を遂げたいくつかの政体が存続した。リードは後世の諸国家の参照点となったこれらの政体を、ユーラシア規模の比較を念頭に置くリーバーマンの憲章国家（上巻第2章訳注5参照）概念を借用しつつ、サンスクリットの語彙を用いてナガラ（nagara）と

表現する。そのほかにも通時的な政体類型として、河口などに位置して海洋と内陸を結びつける玄関口 (gateway) の役割を果たしたマレー系港市のヌグリ (negeri) や、大陸部の大河川中上流域に存在したタイ系の小政体ムアン (muang) を提示した (第 2 章) 9。「商業の時代」の最盛期は、グローバルな視野からは近世 = 初期近代前半の「長い 16 世紀」に相当し、東南アジアでも西方の他地域と同様、普遍宗教間の競合による分極化を背景に、少数の王権が国王の絶対主義 (royal absolutism) をうち立て、火薬・火器の新技術を導入して広大な版図を築く、銃砲国家 (上巻第 4 章訳注 4 参照) の時代でもあった (第 4-6 章)。「17 世紀の危機」 (第 7 章) を経たのちの東南アジアの民俗語化の時代は、前述の通り、近世後半の「長い一八世紀」に国家の凝集が強まる時期と捉えられる (第 8 章)。ベトナムの歴史は、以上の展開との共通点を有しつつも、おもに中国との近接性から独自の経路を辿ったため、特別に 15-19 世紀の長期を扱う一章が割り当てられる (第 9 章)。

こうした 1000 年にわたる国家形成史においても、盛期の植民地主義 (high colonialism) とともに到来した本格的な近代 (full modernity) あるいは高度近代 (high modernity) には特別重要な位置が与えられる (第 12, 15, 19 章)。つまり、19 世紀における諸王権の最後の抵抗 (last stand, 第 11 章) を経過したのち、20 世紀に近代がもたらした国家は、マンダラ (上巻第 2 章訳注 6 参照) などと形容される従来の国家とは根本的に異なっていたというのである。前近代の国家が中心によって規定され、外縁が曖昧であったのに対して、近代国家は厳密な境界に囲われた領域をもち、法治官僚制にもとづいて統治される。リードは、これが個々の国民国家の主権の絶対性と内的一貫性を前提とする国家絶対主義 (state absolutism) を導いたと考える。

しかし、リードによれば、植民地主義 (あるいは、タイの場合は絶対君主制) のもとで国家のインフラストラクチャーが整備されたとしても、それは人びとの反感を呼び起こす人工的構造物にすぎず、各地で高揚したナショナリズムの情感と結びついて国民国家を生み出すためには、ある種の「錬金術」 (第 12 章訳注 4 参照) を必要とした。この解説で議論してきたことに引きつけるならば、植民地主義や絶対君主制という垂直軸の関係性のもとで固定化された中央集権的な国家機構を、ネーションという水平的な理念に^{アダプト}適応させ、^{シンセサイズ}融合/習合させることとでも別言できようか。こうした錬金術は、「20 世紀半ばの危機」 (第 16 章) 以降の脱植民地化の過程で作用し、具体的には交渉と革命のいずれかの経路を辿った。リードは後者の事例としてインドネシアを中心的に取り上げ、革命の提示する一元的 (unitary) ヴィジョンが現実の途方もない多元性とどう折り合いをつけるかに注目して、その過程にさまざまな歴史的記憶を読みこむ¹⁰。例えば、スカルノが唱える団結 = 一体性 (unity) の語には、「一」なるものを希求するジャワの神秘的習合 (mystic synthesis) の伝統が重ねられる。そこで想起されるのは、14 世紀の叙事詩にあるシヴァとブッダを同一視

する文言で、独立国家のモットーともなった「^{ビネカ・トウソングル・イカ}異なれどひとつなり」であり、内面における神との合一（oneness）を説くイスラーム神秘主義の存在一性論（monism）である。

たしかに革命の言説には過去との共鳴がみられ、読者はここにも東南アジアの「知恵」が息づいているのを確認できる。とはいえリードは、革命それ自体がつねに、過去と訣別してまったく新しい未来を創造しようという過剰なまでの熱意とともに展開し、ときに凄惨な流血の事態を招いたことにも注意を怠らない。一元的な理想の将来像と多元的な現実とを折り合わせる作業は、いかなる正当化も許さないほどの多大な犠牲をともなったが、その背景には冷戦という世界的な分極化のもとで域内各国が「権威主義的転回」（第 17 章）を遂げ、暴力行使もいとわぬ強権的な政治がなされたということがあった。また、交渉と革命のいずれの経路を取るにせよ、国家の役割が伝統的に小さかった東南アジア社会では、近代の法治官僚制国家ですらも法執行能力の欠如した「やわらかい国家」（第 18 章訳注 3 参照）になりやすい傾向にあることも指摘される。

さまざまな問題はあつたものの、結果的に 20 世紀末までに錬金術が作用し、国民国家が国語とナショナルな教育システムを通じて人びとの生活を規定する基本的な単位として成立したとリードは評価する（第 19 章）。それはとりもなおさず、東南アジアに長く存在してきた非国家的な空間の、国家空間への組みこみ（incorporation）が一応の完了をみたということでもあった。ネーションを基礎とした政治的安定の趨勢を踏まえて、原書が出版された 2015 年の時点で、リードは東南アジアの未来に比較的明るい展望を描いている。域内各国の政治体制には違いがあるが、全体的にみれば、21 世紀に入ってから選挙の定着など民主主義への移行が進んでいるように見え、国内政治においても、アセアンを主たる舞台とする国際政治においても、多数決より合意形成を重視し、交渉や連立形成を通じて政局が動くという、東南アジアの「知恵」として培われてきたパターンが続いているというのである（第 20 章）。

しかし、この日本語版を準備する 2021 年までのあいだに、こうしたリードの見通しは現実から大きな挑戦を受けてきたといわざるを得ない。原著出版前の 2014 年に軍によるクーデタが起きたタイは、2019 年選挙での民政移管後も依然として軍が政治的影響力を強く保持し、また、70 年間王座にあったプーミポン王の死後、新たに即位したワチラーロンコーン王（1952- 在位 2016-）が軍と協働して王権の強化を図っている。フィリピンでは 2016 年に就任したロドリゴ・ドゥテルテ大統領（1945-）のもとで大勢の麻薬取引容疑者に対する超法規的殺害が行われるなどの強権的な政治が執られた。カンボジアではフン・センが独裁体制を固め、2018 年の選挙前には最大野党に解党命令が出された。ミャンマー（ビルマ）では 2011 年の民政移管を経て、2016 年にはアウンサンスーチーが政権を握るにいたつたものの、こうした改革の流れが 2021 年の軍クーデタによって巻き返された。マレーシアでは、

2018年の選挙で独立以来初めて政権交代が起き、野党連合を率いた92歳のマハティールが首相に返り咲いたが、2020年の政局混迷は選挙によらない政権交代に帰結した。いま東南アジアの政治は新たな「転回」の局面を迎えているのかもしれない。

商業の盛衰

経済・社会の面でも、2020年以降はコロナ禍のために世界中が未曾有の事態に陥っているが、原著執筆時にそれを予見することは当然不可能であった。リードは1970年代以降の東南アジアの経済発展について、一定の留保をつけつつもやはり肯定的に評価しており、そうした認識は「商業への回帰」（後述）という言葉によくあらわれている。先述の通り、リードの歴史観において商業は重要であり、本書で描かれる東南アジア経済史の概略も、近世に商業隆盛によって活況を呈した経済が、近代になって衰退し、1970年代以降の「商業への回帰」でようやく急速な成長を遂げる、というものである。こうした経済史の叙述には、水と緑に囲まれ本来豊かなはずの東南アジアが、なぜ20世紀の終わりに近づくまで貧しかったのかという問題意識が伏流する。

近世の商業隆盛を代表するのは、いうまでもなく「商業の時代」である。前著（Reid 1988; 1993）を踏襲し、本書でも15世紀初頭—17世紀半ばまでが広義の「商業の時代」として設定される。最初の短いブーム（第3章）が15世紀半ばに一度停滞した後、「長い16世紀」に本格的な貿易ブーム（狭義の「商業の時代」、第4章）が到来する。世界的なブームに火をつけたのは東南アジア産の香辛料であり、海上交通上の要衝に位置する東南アジアは内外の商人が活躍する主要舞台ともなる。中継港／貿易中心地（entrepôt）に都市が栄え、契約の慣行や金融技術が発達したことは、この時期に資本主義的軌道に乗ったヨーロッパなど他地域と似ていた。しかし、膨大な富が生み出されたにもかかわらず、東南アジアには資本の蓄積が起こらなかった。リードの説明によれば、東南アジアでは逆説的にも、支配者たちが権力の源泉として商業にきわめて強い関心を寄せたことによって、商人の自由や資本の安全が保証されない不安定な状況が生じ、資本主義的制度の形成に至らなかったという。ただしここにも、垂直性と水平性、あるいは「一」と「多」の拮抗があり、国王の絶対主義が抑制された事例として、実質的には契約主義にもとづく寡頭支配や二元的な統治体制が導入されたり、王が調停者の役割を担ったりしたことが論じられる。

近世の貿易ブームは、「17世紀の危機」（第7章）のもとで下火となる。リードは、これが気候変動を根本的原因とするグローバルな現象であると考えている。リーバーマンの主張する全ユーラシア的な並行（parallel）や、ケネス・ポメランツのアジアとヨーロッパとの分岐（divergence）という議論との異同を明らかにしながら、グローバルな「17世紀の危機」がオランダ東インド会社による独占と強制ともあいまって貿易を衰退させたとの自説を展

開するのである。続く「長い18世紀」（第8章）には、貿易に立脚する海域の諸社会では権力の分散が進み、ジャワや大陸部では中核地域における農業の比重が増して内的一貫性を志向する民俗語化が進展した。とはいえ、商業における国家の役割が縮小する一方、国家の周縁に位置するフロンティア（frontier）ではさまざまなアクターが個人として自由に活動し、再び経済を活性化させていった。とくに南シナ海沿岸の諸地域では中国人／華人の存在が目立ち、1740年頃からの100年間をリードは「華人の世紀」（第9章）と呼ぶ。18-19世紀の経済の自由化の趨勢のなかで、世界市場向けの商品作物生産が拡大し、各地に熱帯産品のプランテーションが展開した（第10章）。

本書は一貫してヨーロッパ（人）の例外性や影響の過大評価を慎重に排する立場を取っており、植民地主義の評価にもその姿勢が反映されている。16世紀以降、域内の港市のいくつかはヨーロッパ勢力の支配下に置かれるが、これらの近世植民地都市は（とくに初期においては）後背地との関係が薄い飛び地（enclave）にすぎず、経済的にはもっぱら中国人移民に依存していた。リードが欧華都市（Euro-Chinese city, 第6章）と名づけるこれらの諸都市は、飛び地的な性質のために周辺に対する政治的・文化的な影響力が限られており、模範的中心にはなりえなかったなど、いくつかの点で重要な特徴があったものの、商業上の技術や多民族性といった他の多くの面においては、アジア人が支配する都市とさして変わらなかったという。また、18-19世紀の経済の自由化（第10章）についても、自由貿易を標榜するイギリスの東南アジア進出がその一因として述べられてはいるが、記述の強調点はむしろ、そうした外的要因に積極的に対応していく東南アジア人の主体性の方に置かれる。リードはつねに、国家よりも個人の、外来者よりも東南アジア人の主体性と自律性に目を向け、そこに歴史の動因をみいだそうとする。

ヨーロッパの影響が著しくなるのは、19世紀後半から20世紀前半にかけての植民地時代盛期であり、その負の影響が人びとの主体性と自律性を減退させ、近代における東南アジアの貧困を決定づけていく（第13章）。たしかに植民地主義のもとで世界市場向けの商業的な農業生産は拡大するが、それが東南アジアの人びとの豊かさには結びつかなかったことを、リードはアンガス・マディソンの一人あたりGDP推計などを論拠に強調する。この時期には人口増も貧困を助長した。東南アジアは、歴史上しばしば地震・火山噴火・津波などの大規模な災害に見舞われ、これが域内の人口増加を抑制してきたが、19世紀以降の比較的穏やかな環境と植民地支配下の平和のもとで劇的に人口が増加した。経済的退行をさらに推し進めたのは、世界恐慌からアジア・太平洋戦争を経て各国の独立と冷戦下の諸戦争へと至る「20世紀半ばの危機」（第16章）であり、その結果、独立当初の東南アジア各国はどこも100年前より貧しくなっていた。

本書を特徴づけるこの近代における貧困化の議論を端的にあらわすのが、peasantization という概念である（第13章）。これはロバート・エルソンからの借用だが、リードがクリフォード・ギアツらの議論を解釈したうえで独特の意味を込めていることに注意する必要がある（第13章訳注2および第18章訳注2参照）。本書では、農民を指す際に、farmer と peasant がかなり厳密に使い分けられており、前者は比較的自由で、移動可能な自律的存在として、後者は自律性が弱く、土地や階層秩序に縛られた存在として描かれる。したがって、リードの peasantization は、近世以来の商業や都市性が減退して「農民化」が進んだことのみならず、自律的な farmer が非自律的な peasant へと変化していく過程、つまり「農民の非自律化」をも指している。農民の自律性減退は、植民地主義と近代性の浸透がその背景にあり、19世紀前半に活性化したフロンティアの自由な空間（第10章）が、各地の自律的政体の終焉（第11章）を経て、近代国家の固い境界線（第12章）によって閉じられていくことや、植民地支配者による「保護」がかえって既存の階層秩序を強化したことともリンクする。商業がもたらす自由と階層秩序による束縛との対照もまた、本書に繰り返しあらわれるライトモチーフである。リードは商業的な自由の空気のなかでこそ、人びとの起業家精神（entrepreneurship）が発揮され、さまざまな冒険的な事業（enterprise）が立ちあがり、革新（innovation）が起きると考えているようだ。農民に関する farmer と peasant の使い分けにもこうした考えを見いだせる。20世紀前半のマレー半島やスマトラ島におけるゴム生産の拡大には、個々に自主的な開拓を行った農民たちの貢献が大きかったことが知られているが、リードは peasantization の時代であってもこうした人びとを指す際には peasant を用いずに、単に smallholder（小土地保有者）とするか、farmer の語を当てている¹¹。

近代の貧困化の趨勢が反転して、東南アジアが再び豊かさを取り戻していくのが先述した1970年代以降の「商業への回帰（the commercial turnaround）」（第18章）の時代である。リードは、この turnaround に三重の意味を込めていると思われる。第一に、一人あたりGDPや乳児死亡率といった客観的な経済・社会指標の好転であり、緑の革命による食糧生産増と衛生環境の向上による出生率低下が、多産多死から少産少死への人口転換を導いたこととも重なる。人口増は植民地期の貧困を助長したが、この時期の経済成長と人口転換は社会の安定に寄与した。第二の意味は、生産を基軸とする新たなグローバル経済の出現にともなって東南アジア地域全体が再び商業の方に向き直したという志向性の転換である。つまり、植民地時代盛期の peasantization の流れが反転し、人びとが主体性と自律性を取り戻していく過程として1970年代以降の時代が描かれる。したがって、第三の意味として、過去の繁栄への時間的な反転も加えられるだろう。おもにリードの念頭には近世の「商業の時代」があると考えられるが、この意味での反転は多分に比喩的なものにすぎず、過去を美化しているのではない。リードは、今日の東南アジア、ひいては全世界が直面する大きな課題にも目配

りを忘れておらず、プランテーション拡大による熱帯雨林の大規模破壊、沿岸部で肥大化したメガシティの脆弱性、腐敗の蔓延などの問題が経済発展の代償として深刻化していることを丁寧に記述している。

以上のように、本書はおおむね古い時代から新しい時代へと時間の流れに沿って構成されているものの、多岐にわたるトピックに関する記述を複雑に交差させながら編み上げられたテキストとなっており、リードの骨太で豊饒な歴史観が見事に一冊の書物に表現されている。ここでは国家と商業に注目して整理を試みたが、他のトピックを取り上げれば、また別の角度からリードの歴史観に光を当てることができるだろう。

リードの描く東南アジア像の大きな魅力のひとつは、借用と混淆のなかから創造性を発現させるところにある。これは東南アジアという地域の特徴であるだけでなく、同地域を考察の対象としてきた東南アジア研究の知的伝統にもみられる態度であろう。一般的に学問の基礎には異なる見解のあいだのコミュニケーションがあるといえるが、学問分野として比較的若い東南アジア研究では、他地域に関する研究蓄積の参照や、ディシプリン間の協働と総合が積極的に試みられてきた。とはいえ、リードが「日本語版への序」で示唆しているように、東南アジアの歴史研究では各国史の優れた論文・著作が数多く発表されることと比べると、それらをまとめあげるかたちで、東南アジアの全域を論じた研究の数は限られている。この並外れた多様性を抱えた地域をひとつの全体として記述する際に必要とされるのは、やはり多岐にわたる個々の研究成果をどのようにひとつのナラティブにまとめあげるかという知恵と技芸である。リードは、そうした困難な課題に取り組んだ一握りの著作に敬意を表し、それらを東南アジアの習合的信仰と同じく *synthesis*（総合の書）と呼ぶが¹²、本書こそがその名にふさわしいだろう。

この訳者解説でみてきたように、リードは先達の、あるいは彼と同時代を生きたさまざまな研究者の知見や概念を借用し、時にそれらに独自の解釈を施しながら自らの歴史観のなかへと消化吸収して、この長大な通史を書き上げた。そこでは個別の国民国家の歴史が超克されるだけでなく、長く東南アジア研究を分断してきた大陸部と島嶼部の区別が相対化され、近世＝初期近代に関する厚い記述は前近代史と近代史のあいだの隔たりを架橋する。また、これまで歴史学の記述対象になりづらかった環境、衣服、ジェンダー、表演、非国家社会といった諸要素も、先史時代から現代に至るまでの長期の歴史のなかに位置づけられた。本書は「東南アジア史家」としての長いキャリアを通じて学界を先導してきたリードの集大成であり、借用と混淆を重んじる東南アジア研究の学問的系譜の上に屹立している。

* * *

本訳書を企画してから世に出すまでは、ほぼ五年を要した。翻訳の構想は訳者の一人今村真央が2016年に思い立ち、太田淳に持ちかけた。太田は二つ返事で承諾し、この二人が青山和佳、蓮田隆志、長田紀之に参加を呼びかけた。太田は旧知の編集者である名古屋大学出版会の三木信吾氏に連絡し、さらにシンガポール国立大学で同僚であったトニー（著者リードをここからはこう呼ばせて頂きたい）にチーム翻訳の意向を伝え、双方から快諾を得た。訳者は2017年7月に最初の会合をもち役割分担を決め、翻訳を開始した。

順調なのはここまでだった。訳者はみな、本書の興味深い内容と平易な文章を日本語にするのは楽しい作業に違いないと確信していた。しかしその希望はすぐに破られた。どの章も多地域のさまざまなトピックを含み、多数の研究を参照しつつ独自の議論が展開され、各自の専門知識ではとても太刀打ちできなかった。訳者たちが連絡や議論に使った共有ファイルはすぐに数百項目に膨れ上がり、合宿を含む研究会で何度も討論しても、多くの問題が容易には解決できなかった。当初予定していた2年はあっという間に過ぎ去った。

この状況を救ったのは、多くの専門家の方々だった。質問に丁寧に回答し専門的な知見から有益なアドバイスを下さったのは、赤崎雄一、赤嶺淳、新井和広、川口洋史、小林篤史、西川慧、光成歩各氏である。さらに一定段階に仕上がった拙い原稿に目を通し、自身の専門分野に関連する部分で助言を下されたのは（上記と一部重複）、青山亨、新井和広、岡美穂子、岡田友和、落合雪野、川口洋史、菊池陽子、笹川秀夫、坪井祐司、福岡まどか、山形真理子各氏である（笹川氏の急逝は痛恨の極みであるが、心よりご冥福をお祈りします）。多くの方がこちらの依頼した以上に、惜しみなく専門的知見を教授して下さった。飯島明子、片岡樹、早瀬晋三、弘末雅士、桃木至朗各氏は全原稿に目を通し、貴重な意見を下さった。時に厳しいものも含む意見はどれも有益なものばかりで感謝の念しかないが、とくに飯島・桃木両氏が全体にわたって綿密に訳文と原著を対照させ詳細なアドバイスを下さったことに、深く謝意を表したい。これらの方々の協力と好意なしに本書の完成はなかったが、訳の最終的な責任はいうまでもなく監訳者の二人にある。

訳者と著者が綿密に連絡を取り合ったことも、この翻訳プロジェクトの特徴である。太田はトニーの業績に対する敬意に加え、個人的に親しい彼への恩返しの思いもあって翻訳を始めた。さきに「同僚」と書いたが、トニーがARI所長で大学の看板教授であった時に、太田はポストドクトラル・フェローというアカデミックスタッフの最底辺にいた。このギャップにもかかわらず、二人は歴史学科で研究室が近かったこともあり、親しく話すようになった。トニーは研究上の相談に十分に時間を取って親身にアドバイスをくれ、太田の退任後

も自身が学会でオーガナイズするパネルに呼んでくれた。雲の上の人と想像していたトニーは、とても親切で気さくでユーモアを欠かさない、そしてテニスを愛してやまないすばらしい同僚だった。その彼の傑作のひとつを翻訳できるのも大きな喜びであったが、このチームが翻訳することを彼がとても喜び、最大限の協力をすると伝えてくれたことは、私たちが奮い立たせた。そしてトニーは、確かに約束を守った。私たちは数回に分けて120項目を超える質問を送ったが、トニーはそのすべてに誠実に回答した。私たちの誤解に対してはそれを解くために丁寧に説明し、私たちが些細な間違いを指摘したときには謙虚に深く感謝の念を示した。そうした点はすでに原著電子版で修正されている。こうしたトニーの誠実で清廉な態度もまた、私たちが最後まで努力を続ける原動力となった。

翻訳は、青山が13, 14, 18, 19章、今村が「はじめに」、1, 2, 5章、太田が「日本語版への序」、3, 4, 6, 10, 20章、長田が12, 15, 16, 17章、蓮田が7, 8, 9, 11章を担当した。長田は原著の議論のキーとなる語句（本解説第3, 4節）を抽出して分析し、訳語を策定する作業を主導した。全員がすべての原稿を読み、研究会で文章を検討し合った。長田と太田が監訳に取り組むあいだ、青山はフィリピンや人類学・経済学関係の用語、今村は宗教に関わる問題、蓮田はベトナムと漢文史料に関する問題などについて二人からの質問に答え、監訳者とともに訳注を作成した。

専門家の方々の意見を反映させ、さらに訳文を改訂したのは監訳者の二人である。この作業はまず上巻を太田、下巻を長田が行ったが、その後二人が何度もすべての章をチェックしたため、どちらの巻にも二人の考えや文章が反映されている。2020年度後半からこうした作業を始め、この二人がおもにメールで何度も議論して訳を確定した。途中からは文字通り毎日何通もの長いメールを交換し、たびたびオンラインビデオも用いて、議論は白熱した。訳語の確定では、原著の主張を明確に表現することを最重視し、今まで広く使われた語を改変したものもあれば、まったく新たに考案したものもある。トニーに直接説明してもらって、原著以上の情報をもとに訳した箇所もある。そうした工夫の成否は読者の評価を待つよりほかないが、もし私たちの訳が議論を喚起し、作品と読者の対話を生み出すものとなれば、望外の喜びである。

監訳作業に時間を割けたのは、太田が2021年度に勤務校で「留学」（在外研究）制度を利用でき、長田も勤務機関の理解を得られたためであり、それぞれ慶應義塾大学とアジア経済研究所に感謝したい。また、資料収集や事務作業を手伝ってくれた佐藤舞子、本書の数千におよぶ地名や人名を抜き出し表記の統一を手助けしてくれた藤村瞳、校正や索引作成の細かい作業を手伝って下さった森山由美子各氏にも深く感謝の意を表したい。名古屋大学出版会の三木氏は訳者のさまざまな要望に対応しつつ粘り強く本訳書を完成まで導いて下さり、同出版会の井原陸朗氏はきわめて高水準の校正作業を行って下さった。このお二人に

も厚く感謝申し上げたい。また今村、太田、蓮田がそれぞれ代表を努める科学研究費プロジェクト（18H03599, 19H01322, 18K00991）から資金的支援を受けたことも、記して謝意を表したい。

最後に、訳者が長期にわたりこの仕事にかかわるのを可能にした身近な人びとに、感謝を伝えることをお許し頂きたい。青山の娘の天音さん、今村の配偶者ジャッキーさん、太田の配偶者佐和香と娘のエリン、長田の配偶者光成歩さんと子供の糸ちゃんと朔くん、蓮田の両親、和俊さん・喜代子さんの理解と心遣いがある、この本を完成させることができました。心から感謝します。

2021年10月

太田淳・長田紀之

注

¹ ここに紹介したリードの著作は単著・(共) 編著を中心とするごく一部にすぎない。より完全な著作リストは先述の Wade and Li (2012) および現在 (2021 年 10 月) リードが所属する ANU アジア太平洋カレッジ文化歴史言語学部 (The School of Culture, History & Language) のウェブサイト参照されたい。<https://researchprofiles.anu.edu.au/en/persons/anthony-reid/publications/>

² 東南アジア全域史は、本節で取りあげる以外にも、日本を中心にアジア各地などで多く書かれているが、ここでは本書と関連する欧米で出版された英文著作をおもな対象とし、邦文著作は最低限の言及にとどめる。

³ 戦前にもこの地域を「東南アジア」と呼び考古遺物や王権を検討する研究が行われたが、地域全体を対象とする研究があらわれるのは戦後のことである (Legge 1993, 3-15)。

⁴ 東南アジアにおけるヨーロッパ人の影響が 18 世紀末まで限定的だったとする議論は、第二次世界大戦前に発表された J・C・ファン・ルールの著作にみられたが、彼の議論は長いあいだ実証性に欠けると批判されていた (Leur 1955)。

⁵ この著作は『商業の時代』下巻以前に出版されたが、それまでのリードの著作を参照している。

⁶ 個別の宗教に関しては、devotion を「布施」「喜捨」「献身」などと訳せる箇所もあったが、横断的に同一の語彙を用いるリードの意図を汲み、訳語を基本的に「帰依」に統一した。

⁷ 中国人／華人 (Chinese) などについて、外来者であることを強調する場合には、「寄留者 (sojourner)」（Reid 1996）や「外部者 (outsider)」（Chiro and Reid 1997）が用いられる。

⁸ 既存の伝統的文化規範が組みこまれた言説という意味の idiom の用法は、フィリピン史家レイナルド・イレート (Ileto 1979 [イレート 2005]) を踏襲していると思われる。

⁹ かつて石井・桜井 (1985) も同様の現地語語彙を用いた類型化を試みたことがある。ただし、リードが本書でナガラ、ヌグリ、ムアンとしたのとはほとんど同じものを、石井・桜井はそれぞれプラ、ヌガラ、ムアンとした。ヌガラはナガラのマレー語化した語彙だが、リードのナガラと石井・桜井のヌガラは異なる対象を指している。日本および英語圏での、東南アジア前近代国家の類型論と時代区分論については、桃木至朗が研究史を手際よくまとめている (桃木 1996、47-154 頁)。

¹⁰ インドネシアの革命とネーション形成に関する個人論文集 (Reid 2011) も出版された。

¹¹ farmer と peasant の区別は重要だが、いくつかの事情により訳書ではどちらも「農民」と訳し、文脈上必要な箇所にだけ補足説明やルビを付した。本訳書作成の途中では、peasant に「貧農」や「小農」を当てることも検討したが、どちらもリードの peasant 概念にはうまく合致しないと判断した。

¹² 本書では、第 2 章でジョルジュ・セデスの 1944 年の古典的著作にこの表現を用いている。またリードは別の本で、東南アジアの国家形成を論じたトニー・デイ (Tony Day) の 2002 年の単著 *Fluid Iron* を an ambitious synthesis と呼んでいる (Day 2002; Reid 2010,21)。いずれも単独の著者によって東南アジア全体が論じられていることに留意したい。

参考文献

- Anderson, Benedict R. O'G. 1983. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso (ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳, 書籍工房早山, 2007年) .
- Benda, H. J. 1962. "The Structure of Southeast Asian History: Some Preliminary Observations." *The Journal of Southeast Asian History* 3:1, 106-138.
- Blussé, Leonard. 1998. "Chinese Century. The Eighteenth Century in the China Sea Region." *Archipel* 58:3, 107-129.
- Blussé, Leonard and Femme Gaastra, eds. 1998. *On the Eighteenth Century as a Category of Asian History: Van Leur in Retrospect*. Aldershot: Ashgate.
- Chiro, Daniel and Anthony Reid, eds. 1997. *Essential Outsiders: Chinese and Jews in the Modern Transformation of Southeast Asia and Central Europe*. Seattle: University of Washington Press.
- Day, Tony. 2002. *Fluid Iron: State Formation in Southeast Asia*. Honolulu: Hawai'i University Press.
- Hall, D. G. E. 1955. *A History of South-East Asia*. London: Macmillan.
- Hall, Kenneth R. 1985. *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Ileto, Reynaldo. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press (レイナルド・C・イレート『キリスト受難詩と革命——1840~1910年のフィリピン民衆運動』清水展・永野善子監修, 川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳, 法政大学出版局, 2005年) .
- Kahin, George M. 1959. "Preface." In ed. George M. Kahin, *Governments and Politics of Southeast Asia*, Ithaca: Cornell University Press, v-viii.
- Kathirithamby-Wells, J. 1990. "Introduction: An Overview." In eds. J. Kathirithamby-Wells and John Villiers, *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.
- Legge, John D. 1993. "The Writing of Southeast Asian History." In ed. Nicholas Tarling, *The Cambridge History of Southeast Asia*. Cambridge: Cambridge University Press, 1-50.
- Leur, J. C. van. 1955. *Indonesian trade and society: Essays in Asian social and economic history*. The Hague: W. Van Hoeve.
- Lieberman, Victor. 2003;2009. *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800-1830*. 2 vols. Cambridge etc.: Cambridge University Press.

- Morgan, David and Anthony Reid, eds. 2010. *The New Cambridge History of Islam: The Eastern Islamic World, Eleventh to Eighteenth Centuries*. Vol.3. Cambridge: Cambridge University Press.
- Osborn, Milton. 1979. *Southeast Asia: An Introductory History*. Sydney: George Allen & Unwin.
- Pollock, Sheldon. 2006. *The Language of the Gods in the World of Men: Sanskrit, Culture and Power in Premodern India*. Berkeley: University of California Press.
- Reid, Anthony. 1969. *The Contest for North Sumatra: Atjeh, the Netherlands, and Britain 1858–1898*. Kuala Lumpur; Singapore: Oxford University Press.
- Reid, Anthony. 1979. *The Blood of the People: Revolution and the End of Traditional Rule in Northern Sumatra*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Reid, Anthony, ed. 1983. *Slavery, Bondage and Dependency in Southeast Asia*. St Lucia: Queensland University Press.
- Reid, Anthony. 1988;1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*. 2 vols. New Haven and London: Yale University Press (アンソニー・リード『大航海時代の東南アジア〔新装版〕』全2巻, 平野秀秋・田中優子訳, 法政大学出版局, 2002年) .
- Reid, Anthony. 1992. “The Rise and Fall of Sino-Javanese Shipping.” In eds. V. J. H. Houben, H. M. J. Maier, and W. van der Molen, *Looking in Odd Mirrors: The Java Sea*. Leiden: Leiden University, Department of Southeast Asian Studies, 177–211.
- Reid, Anthony, ed. 1993. *Southeast Asia in the Early Modern Era: Trade, Power, and Belief*. Ithaca: Cornell University Press.
- Reid, Anthony. 1994. “The Unthreatening Alternative: Chinese Shipping in Southeast Asia 1567–1842.” *RIMA* 27, 13–32.
- Reid, Anthony, ed. 1996. *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese in Honour of Jennifer Cushman*. Sydney: Allen & Unwin.
- Reid, Anthony, ed. 1997. *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. Basingstoke and London: Macmillan Press.
- Reid, Anthony. 2004. *An Indonesian Frontier: Acehese and Other Histories of Sumatra*. Singapore: Singapore University Press.
- Reid, Anthony, ed. 2006. *Verandah of Violence: The Background to the Aceh Problem*. Singapore: Singapore University Press.
- Reid, Anthony. 2010. *Imperial Alchemy: Nationalism and Political Identity in Southeast Asia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reid, Anthony. 2011. *To Nation by Revolution: Indonesia in the 20th Century*. Singapore: NUS Press.

- Reid, Anthony. 2016a. “Revisiting Southeast Asian History with Geology: Some Demographic Consequences of a Dangerous Environment.” In eds. Greg Bankoff and Joseph Christensen, *Natural Hazards and Peoples in the Indian Ocean World: Bordering on Danger*. New York: Palgrave Macmillan, 31-53.
- Reid, Anthony. 2016b. “Two hitherto unknown Indonesian tsunamis of the seventeenth century: Probabilities and context.” *Journal of Southeast Asian Studies* 47:1, 88-108.
- Reid, Tony. 2018. *Mataram: A Novel of Love, Faith, and Power in Early Java*. Burrough on the Hill: Monsoon Books.
- Ricklefs, M. C. 2006. *Mystic Synthesis in Java: A History of Islamization from the Fourteenth to the Early Nineteenth Centuries*. Norwalk, Connecticut: EastBridge.
- Ricklefs, M. C., ed. 2010. *A New History of Southeast Asia*. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan.
- Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press (ジェームズ・C・スコット『ゾミア——脱国家の世界史』佐藤仁監訳, みすず書房, 2013年) .
- Smail, J. R. W. 1961. “On the Possibility of an Autonomous History of Modern Southeast Asia.” *Journal of Southeast Asian History* 2:2, 72-102.
- Steinburg, David J. ed. 1971. *In Search of Southeast Asia: Modern History*. New York: Praeger.
- Tagliacozzo, Eric and Chang Wen-Chin. eds. 2011. *Chinese Circulations: Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia*. London and Durham: Duke University Press .
- Tarling, Nicholas, ed. 1993. *The Cambridge History of Southeast Asia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wade, Geoff and Li Tana. 2012. “Anthony Reid: Through Time and Space.” In eds. Geoff Wade and Li Tana, *Anthony Reid and the Study of the Southeast Asian Past*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 3-28.
- Wolters, O.W. 1999[1982]. *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*. Revised edn. Ithaca: Cornell University Southeast Asian Program.
- 石井米雄・桜井由躬雄. 1985. 『ビジュアル版世界の歴史 12 東南アジア世界の形成』講談社.
- 太田淳. 2016. 「東南アジア女性はどう描かれてきたか——17～19世紀ジェンダー史研究の素描」水井真理子ほか編『女性から描く世界史——17～20世紀への新しいアプローチ』勉誠出版, 1-17頁.
- 桜井由躬雄. 1995. 「研究最前線——東南アジアの18世紀」『東南アジア 歴史と文化』24, 136-140頁.

桜井由躬雄. 2001. 「総説」 桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史 4 東南アジア近世国家群の展開 18世紀』岩波書店, 1-31 頁.

桃木至朗. 1996. 『歴史世界としての東南アジア』山川出版社.

リード, アンソニー. 2014. 「危機的環境下で歴史を書くということ —— 「火山の環」はどのように変化をもたらすか」 太田淳訳『社会経済史学』79:4, 467-79.